

ていねいな暮らしのあつたころ

佐野二彦の撮った伊深の里山



「畦草を刈り道に敷き干す」 昭和39年7月28日撮影

「畦草刈り」 あぜくさ

田植えが終わり、稲が育つころになると、畦草を刈ることが農家の仕事のひとつでした。畦草は、夏の間三回から四回刈ることができると、あつという間に生い茂るものでした。これらの畦草は、牛や馬の飼料になりました。

右の写真は刈った畦草を近くの道に敷いて、冬の飼料用の干し草にしているとあります。車はほ



「畦の草刈り」 昭和38年7月27日撮影

とんど通ることもなく、これが手早く簡単に干す知恵でした。干し草には、家畜が好む、細くて長さがそろっている草だけが選ばれました。干し草は、丸く縛って馬小屋の上などに上げて保存しました。畦草はその田んぼの所有者のもので、所有者のないところに生えた草は、争うように取り合いになったということです。

左の写真は、撮影された日付から「二番草」を刈っている様子と思われまます。刈っている人の向こうには、畦に植えたアゼマメ(大豆)が見えます。